

[課程－2]

審査の結果の要旨

氏名 八木 智子

本研究は、母親の不安・抑うつ症状が子のチックの経過に与える影響を縦断的に検討する目的で、大規模思春期コホートを対象として、10歳時と12歳時の2時点で、母親の不安・抑うつ症状と子のチックを評価し、構造方程式モデリングに基づく交差遅延モデルを用いて解析を行ったものであり、以下の結果を得ている。

1. 母親の不安・抑うつ症状と子のチックの有無について解析した結果、母親の不安・抑うつ症状が強いほど、2年後に子がチックを呈しやすく、子がチックを有すると、2年後の母親の不安・抑うつ症状がより高かった。母親の不安・抑うつ症状と子のチックは、双方向性に影響を与え合う関係であり、両者が悪循環を来す可能性が示唆された。
2. 母親の不安・抑うつ症状と子のチックの重症度について解析した結果、母親の不安・抑うつ症状が強いほど、2年後の子のチックは重症であり、子のチックの重症度が高いほど、2年後の母親の不安・抑うつ症状がより高かった。しかし、本研究の重症度のスケールはチックがない場合を含んでいることから、チックの重症度と母親の不安抑うつ症状の関係は、チックの有無と母親の不安抑うつ症状の関係と連動しており、チックの有無と母親の不安・抑うつ症状の結果をみているに過ぎない可能性がある。チックの重症度と母親の不安・抑うつ症状の間に、チックの有無と母親の不安・抑うつ症状の間にみられた二値的な関係以上の量的な関係があるかを検討するために、2時点両方においてチックがあった児童を抽出して交差遅延モデルの解析を行ったところ、チックの重症度と母親の不安・抑うつ症状の関係は、横断的にも縦断的にも非有意であった。従って、チックの重症度と母親の不安・抑うつ症状の間の量的な関係を示す証拠は得られなかった。
3. チックと父親の不安・抑うつ症状について解析した結果、両者の間に有意な関連はみられなかった。
4. チックの定義をより狭く設定して母親の不安・抑うつ症状とチックの有無について解析した結果、上記1と同様に、母親の不安・抑うつ症状が強いほど、2年後に子がチックを呈しやすく、子がチックを有すると、2年後の母親の不安・抑うつ症状がより高いという結果であり、チックの有無と母親の不安・抑うつ症状の間に双方向性の関係が見られた。
5. チックの経過パターンをサブグループに分類したうえで、母親の不安・抑うつ症状

とチックの重症度について解析した結果、10歳時にチックがある場合とない場合どちらにおいても、10歳時の母親の不安・抑うつ症状が2年後のチックの重症度に影響することがわかった。

以上、本論文は子のチックと母親の不安・抑うつ症状を初めて縦断的に評価し、その双方向的な関係を明らかにし、思春期前期児童のチックに対して、本人に対する治療のみならず、母親の不安・抑うつ症状に対する介入が重要である可能性を示唆した。本研究は、これまで知られていなかった、母親のメンタルヘルスがチックの経過に影響する可能性を示したものであり、今後のチックの臨床に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。